



北海道帯広三条高等学校
〒080-2473
北海道帯広市西23条南2丁目12番地
TEL: 0155 (37) 5501
発行日 令和2年12月22日

地域との協働的な学びを推進しています！

先月号でも保護者・地域・行政と連携・協働し、学びの質を変える取組を推進していることをお伝えしましたが、今回も本校の取組を紹介したいと思います。

まず、9日には3年次選択科目「自己表現」の発表会が、帯広市役所都市政策課課長大橋様、十勝総合振興局地域政策課課長千葉様、十勝教育局長村上様をはじめ7名の方々の出席をいただき実施されました。それぞれのグループが市役所や総合振興局の方々のレクチャーやアドバイスをいただきながら、地域課題をアンケートや実地調査を踏まえて分析、その解決方法をプレゼンするというものでした。テーマは「公共交通」や「人手不足」「都市景観」など多岐にわたり、それぞれ高校生の視点から具体的な提案をしていました。大橋様からは「アンケートは説得力を持つ有効な手段。提案もコスト意識があったのがいいです」。この提案を振興局担当の中で共有していきたいと思います。」また、千葉様からは「そのまま施策につながるような発表でした。今後はより自分たちができる課題を設定していくとよいですね。」と講評をいただきました。生徒たちは「発表を聞いてもう少し議論したいと思った」という声もありました。こういった主体的な学びを引き出すことはもちろんですが、社会とのつながりの中でのキャリア形成にも期待が



もてます。将来このような学びをきっかけに地方行政に携わる人材が輩出できるようになるといいですね。

また、道教委主催事業「高校生の小・中学校等におけるインターンシップ」では、4名の生徒が今年度の地域連携研修校である帯広第二中学校、帯広西小学校でのインターンシップに参加することになりました。この事業は教員志望の高校生のために企画されているものです。詳細は次号にて報告させていただきます。

学びの標語入選

十勝管内「北海道学び推進月間」標語コンクール（十勝教育局主催）で本校から2作品が入選しました。

優秀賞に輝いたのは1年2組の社内駿斗くん、奨励賞には同じく6組の月居奈々瀬さんが選ばれました。二人とも受賞には驚いたようですが、それぞれの標語について次のように語ってくれました。

社内君「今の学びを通じて勉学の道を極め、夢の実現につながることを五七五で表現しました。」

月居さん「未来につながることをバトンで表現できたらしいなあと思いました。」

言うまでもなく人は一生学び続けるものです。そのためにも、二人の標語が示すように今の学びを大切にすることが大切ですね！



【優秀賞】
学びから
いずれ極まる
個々の道

【奨励賞】
今つなぐ
過去から未来へ
学びのバトン



吹奏楽部



“72代の小さなWINTER CONCERT”



12日、感染症対策を十分に施したなかで吹奏楽部の“72代の小さなWINTER CONCERT”が、市民会館大ホールで開催されました。第1部はアンサンブルによる演奏、第2部は全員による演奏が披露されました。第2部のオープニングはマーチ「夢と勇気、憧れ、希望」で、コロナ禍での重い空気を吹き飛ばす力強い演奏でした。今回は感染症対策のため、残念ながら部員家族と関係者のみでの開催となりましたが、第72代「吉田組」39人の奏でるハーモニーが大ホール一杯に響きました。

1日でも早く感染症が収束し、聴衆と一体となって演奏を楽しめる日が来ることを心から祈っています。

第8回 生徒指導部長 橋本 賢 教諭

高校時代は限界を決める時期ではない！

◆ハンドボールは挫折の賜物!?

私は小学校から中学校までサッカーをやっていました。小学時代はそこそこ上手かったし他の人に負ける気がしませんでした。ところが中学になると、みんなどんどん背が伸びて私を追い越していくのです。私は中学3年の春でようやく156cm。体格で負けるようになると、小学時代にできたことが中学ではできなくなりました。これが私の人生の中で初めての挫折でした。それで高校に入ったら違うスポーツに挑戦してみようと思ったのです。実は部活動を引退してから急激に（1年間で10cm以上）背が伸びたので、体格の問題はクリアしてたんですけどね（笑）。

高校で選んだのがハンドボールでした。走る、跳ぶ、投げる、激しい接触もある、バスケットのような、サッカーのような、とてもダイナミックなおもしろい競技で、その魅力にはまってしまいました。ハンドボールは展開が早いスポーツです。次を予想して自分のポジションを決めなくてはなりません。そしてその予想がチームのみんなと共有していなければプレーは続きません。チームとして一体となったプレーができた時の気分は最高です。そのためには日頃からコミュニケーションをとりチームとしての一体感をつくらなくてはならないのです。私はこのスポーツには人生に必要な要素があふれていると思っています。

◆自分がどうしたいかで世界は変わる

大学でもハンドボール中心の生活でした。寮生活では1年生の

役割が多く、自分の自由になる時間は寝る前の1時間くらいでした。練習もうさぎ跳び2時間とか、今では考えられないようなものもあって、理不尽ってこういうことを言うんだと本気で思ったこともあります。でもそんな生活をしていてもあきらめる気持ちは起こりませんでしたし、何事に対しても自分にとってどんな意味があつてどうプラスになるのか考えられるようになりました。入学当時僕は誰よりも下手でした。でも1年後にはわからないって一生懸命練習しました。自分がどうしたいかで世界は変わるのです。

役員が多く、自分の自由になる時間は寝る前の1時間くらいでした。練習もうさぎ跳び2時間とか、今では考えられないようなものもあって、理不尽ってこういうことを言うんだと本気で思ったこともあります。でもそんな生活をしていてもあきらめる気持ちは起こりませんでしたし、何事に対しても自分にとってどんな意味があつてどうプラスになるのか考えられるようになりました。入学当時僕は誰よりも下手でした。でも1年後にはわからないって一生懸命練習しました。自分がどうしたいかで世界は変わるのです。

◆現状維持は意味がない！

教員になってすぐ定時制高校を経験しました。色んな事情を抱えた生徒たちがいます。その中でしっかり成長して社会に出て行く姿に教師としての私も育てられました。そして三条高校に赴任して5年。私は三条生に無限の可能性を感じています。生徒の皆さんは現状に満足していることはありませんか？もっともっとチャレンジしてほしいと思います。少なくとも高校時代で自分の限界を決めることではないんです。私もオリンピック選手を育てるという目標に向かってチャレンジを続けます。



三条高校で輝いている生徒を紹介します。インタビュアーは校長です。

インタビュー

キラリ

春高バレー全道ベスト8

前主将 別所 龍月くん 現主将 阿 藤 響くん



11月12日から開催された春の高校バレー代表決定戦でベスト8の男子バレー部。3年生の最後の大会として出場した前主将の別所君（写真右）と現主将の阿藤君にお話を伺いました。

ベスト8を賭けた函大有斗戦では1セット先取した後の2セット目をとられてしまいましたが、阿藤君は「内心あせりました」と振り返ったのに対し、別所君は「2セット終盤も冷静でした」と対照的でした。その言葉通りしっかり3セット目をとってベスト8を果たしました。準々決勝はシード校の札幌藻岩高校。平均身長が一番高いチームで、本当に壁のように感じたとか。それでも別所君は「自分たちなりの戦いはできたと思います。全力を出し尽くしたという思いが強く、悔いは全く感じませんでした」と胸を張ります。阿藤

君も「悔いはないと言えば嘘になるけど、先輩たちとの最後の試合が一番楽しかったと思ってよかったです」と笑顔で語ります。新キャプテンの阿藤君は高校入学後にバレーを始め、ポジションはセッター。「できることがひとつずつ増えていますが、次へ進めば進むほど課題が出てきます。でも新しいことにチャレンジできる、それに向かわせてもらうことに感謝です。キャプテンという立場は周囲に支えられていることが実感できますし、人として大きく成長させてくれるものだと思います」と自覚十分です。

卒業してもバレー部をサポートしたいという別所君は「小学生の頃からずっとバレーをやっていますが、高校で勝てるようになって初めてバレーに真正面から向き合えるようになってきました。それにつれて周囲をよく見て自分が行動できるようになりました。相手とのコミュニケーションがうまくできるようになったと思います」

二人とも「バレー部は先輩後輩の仲がめちゃくちゃいいんです」と言い、バレーの魅力は「みんなで繋いでいくこと」と声を揃えました。先輩から後輩へのバトンタッチはしっかりできているようです。